



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	ニーチェのニヒリズム概念
Author(s)	古田, 耕作
Citation	[岐阜大学教養部研究報告] vol.[13] p.[94]-[103]
Issue Date	1977
Rights	
Version	岐阜大学教養部独語研究室 (Faculty of General Education, Gifu University)
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/47398

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

ニーチェのニヒリズム概念

古 田 耕 作

岐阜大学教養部独語研究室

(1977年10月15日受理)

Der Begriff "Nihilismns" beim späten Nietzsche

KOSAKU FURUTA

「ニヒリズムの克服」, 「ニヒリズムの自己克服」, これが後期N (以下ニーチェをNと略す)の努力の骨格をなしている。N自身の, かつ彼の時代の病気としてのニヒリズム, この病気にたいする特効薬として期待されたグロテスクなドグマ——「超人」, 「永遠回帰」, 「権力意志」。

「私の物語るのは, 次の2世紀の歴史である。私は, 来たるべきものを, もはや別様には来たりえないものを, すなわちニヒリズムの到来を書きしるす。(中略)私たちの全ヨーロッパ文化は長いことすでに, 10年また10年と加わりゆく緊張の拷問でもって, 1つの破局をめざすがごとく動いている。(中略)ここで物語っているのは, これとは逆に, おのれをかえりみる以外にはこれまで何もしてこなかった者である。(中略)ヨーロッパの最初の完全なニヒリストとしてではあるが, しかしこのニヒリストは, ニヒリズム自身をすでにおのれの内部において終末まで生きぬいてしまっており, ——それをおのれの背後に, おのれの足下に, おのれの外部にもっているのである。』筑波山でとれたガマの油の宣伝のような仰々しい喋り方は気に障るとしても, N自身の主観的な狙いと抱負だけは示されている。Nのいう「ニヒリズムの到来」, 「ニヒリズムの克服」が, どういうものであるか, 若干の整理と考察を試みる。

ニヒリズムという概念は, かなりアイマイであるが, アイマイなりに, 常識的, 平均的なニヒリズム概念は存在し通用している。「ニヒルな表情」とか「ニヒリズムの人生観」という表現は, 誇張された表現という点でイヤミはあるが, とにかく使用され了解されている。Nのニヒリズム概念は, こういう常識的なニヒリズム概念から, 大幅にはみだすことになるが, 基本のところでは, ここに根ざしていることを確認しておくべきである。

「道徳は出来そこないの者どもがニヒリズムにおちいらないようにふせぐが, それは, 道徳が, 各人に無限の価値を, 形而上学的価値をあたえ, この世の権力や位階とはべつの, ある秩序のうちへと組み入れることによってである。』神の後光のさした道徳の功罪が語られているわけであるが, このNの見解の当否についての判断は, ここでは保留することにして, この引用文の中のニヒリズムという語の使いかたに注目したい。この場合ニヒリズムとは, まったく常識的な意味であって, 要するに, (この場合には, いわゆる社会的弱者が) 生きているのがイヤになることである。

Nのいうニヒリズムとはどういうものであるか。「ニヒリズム、目標が欠如している、〈何故か?〉にたいする答えが欠如している。ニヒリズムとは何を意味するか?——最高の諸価値が価値を失うこと」。これはニーチェ研究書などに、気楽に引用されているが、実感に裏づけられた理解となると、はなはだ困難である。人生の目標、人生の意義、これにたいする答えとしての「最高の諸価値」、これが個人の意識においても、集団の意識においても——集団が大きくなるほど、当然、これが擬制となる割り合いは多くなるであろうが——蔽として存在していて、その他の諸価値を、ほぼ従属させ、統合している状態。こういうピラミッド型の価値体系を想像するには、かなりの努力が必要である。われわれが、たいてい多次元的世界の中で、諸価値の雑然たる混在の中で生きているからである。第1 義的な目標によって貫徹された人生、そして、その目標に向けて諸価値を従属させ統合している人生、これはたしかに存在している。たとえばカストロとゲバラたち、たとえば毛沢東たち。そして、おそらくは、N自身が身近に知っていた19世紀中葉のルーテル派の牧師たちのうちの良質部分。カストロや毛沢東は、自己の決意によって、それぞれの「最高の諸価値」を選びとった。(ハイデッガーやサルトルのくちまねをすれば、「投企」した)。カストロや毛沢東の次の世代にとっては、それは尊重すべき、既成の信条、制度となる。そして伝統的諸価値が、その中に統合されてゆくであろう。これにくらべれば、キリスト教文化圏において、キリスト教の伝統は長く重い。それは信仰であるとともに制度でもあった。「神の死」は個人意識においては信仰の喪失であり、文化、社会においてはキリスト教的擬制の空洞化である。「最高の諸価値が価値を失うこと」、そして、それに支えられていた従属的諸価値がゆらぐこと、つまり、「親ガメこけたら皆こけた」というのがNのニヒリズム概念の基本である。

Nのニヒリズムは、N自身がいうごとく、「ヨーロッパのニヒリズム」であって、キリスト教と切りはなしては考えられない。Nとしては当然のことだが、Nにはキリスト教にたいする過大評価——キリスト教文化圏の外から見て——がある、われわれがNのニヒリズムを考察する場合に、このことを念頭におくべきである。

「最高の諸価値が価値を失うこと」、これをもう少しこまかく眺めてみよう。

「ニヒリズムが玄関に立っている。すべての訪問客のうちで最も不気味な、この客はどこからきたのか?——

1. 出発点。「社会的困窮状態」や「生理学的変質」や、ましてや墮落を、ニヒリズムの原因として指摘することは誤謬である。これらのものは、いぜんとして、さまざまな解釈を許容する。そうではなくて、1つのまったく特定の解釈のうちに、キリスト教的・道徳的解釈のうちにニヒリズムがひそんでいる。いまやこのうえなく親切で、思いやりのある時代になっている。困窮は、心的な、身的な、知的な困窮は、それ自体では、ニヒリズムを、すなわち、価値、意味、願望の徹底的拒否を、産みだすことは決してできない。
2. キリスト教の没落——その道徳（これはキリスト教から切りはなせない——）での没落。この道徳はキリスト教の神に反抗する。(キリスト教によって高度に発達した誠実の感覚が、すべてのキリスト教的世界解釈と歴史解釈の虚偽や欺瞞にたいして嘔吐をもよおすにいたる。「神は真理である」から「すべてが誤りである」という狂信への反轉。行動の仏教……⁴
3. 道徳への懐疑が決定的なことである。道徳的世界解釈の没落。この解釈は、彼岸性のうちへの逃避をこころみてしまったのち、もはや裁可力(Sanktion)をもたず、その没

落はニヒリズムに、すなわち「すべてのものはいかなる意味ももたない」に終る。(巨大な力がささげられた唯一の世界解釈が遂行しえなくなると——すべての世界解釈は誤りではなからうかという不信がめざめる——)(以下略)

4, 5, 6, 7, 8(略)』

この引用文において、1から4までは、ニヒリズムにかんする原理的考察であり、引用は省略したが、5から8までが、ニヒリズム発生の、いわば周辺的原因の考察といえよう。

1の冒頭で示されているごとく、Nはニヒリズムの原因として、社会的要因を認めたがらない。Nの関心の焦点はキリスト教にある。この態度が、Nのニヒリズム考察を方向づけ、性格づけている。

2の、キリスト教によって育成された「誠実の感覚」がキリスト教ドグマの虚偽を見やぶる、と断定されているが、これは説得力にとぼしい。キリスト教のドグマは、もともと、合理的思考にとっては、奇怪千万なしろものであった。いわゆる「つまずきの石」であった。仰々しい「誠実の感覚」などをもちだす必要はなかった。19世紀の後半になって、かつN自身にとっても後期になって、とつぜん、キリスト教ドグマの「虚偽や欺瞞」が明白になったはずはない。

Nはこの断定を他の箇所でも述べており、かつ、この断定を盲目的に祖述しているN研究書も多い。この理由は不可解としか言いようがないが、強いておしはかれば、キリスト教が「誠実の感覚」を育てあげ、それがキリスト教に反抗し、否定するという図式から、キリスト教の自己止揚、価値の自己発展、自己止揚といった、一見、整合的な理論構成の可能性、その魅力に引きずられたのではあるまいか。

Nがここで語っているニヒリズムとは、キリスト教信仰の反作用である。「すべてが誤りである」、「すべてのものはいかなる意味ももたない」——これはNのいうごとく「狂信」(fanatischer Glaube)である。信仰の対極たるニヒリズムにおいても、信仰の高電圧が、逆方向に維持されている。この高電圧の原因は何か。神という虚構による人間の価値の絶対化である。

「キリスト教道德の仮説はいかなる利益をもたらしたか？」

1. それは、生成や消滅の流れのうちにある人間の卑少性や偶然性とは反対に、人間に絶対的価値をさずけた。
2. それは、それが苦悩や禍害のあるにもかかわらず世界に完全性という性格をみとめたかぎり、——かの「自由」をもふくめて、神の弁護者をつとめた——。禍害は意味に満ちて出現した』

人間の弱さ、はかなさにもかかわらず、人生は、世界は、有意義な、ありがたいものとなった。大地震、疫病、飢饉、戦争も神のさずけた試練である。個人の心の中の、ささやかな悪をも神は見守っている。「個人の靈魂不滅」。「さいごの審判」によるハッピーエンド。そして、このドグマは個人の信仰であるにとどまらず、いわゆる「共同幻想」として個人をささえたのみならず、このドグマをかかげた強大な地上的権力があつた。まことに有難いことで、生きているのがイヤになるひまは、なくなるであろう。

だが希望が大きいほど絶望も大きい。絶対的な価値の崩壊は、絶対的な無価値、無意味をひきおこす。

「極端な立場は、緩和された立場によっては解消されず、これまた極端な、しかし逆の立場によって解消される。かくして、神への、そして本質的に道德的な秩序への信仰が、もはや維持されえないときには、自然の絶対的な無道德性への信仰、無目的性や無意味性への信

仰こそ、心理的に必然的な慾情である。現在ニヒリズムが出現しているが、これは、生存の不快が以前よりも増大したからではないのであって、禍害のなかの、いや、生存のなかの〈意味〉が、そもそも信頼されえなくなったからである。ひとつの解釈が没落した。しかしそれは解釈そのものとみなされていたので、あたかも生存のうちにはいかなる意味もまったくないかのごとく、あたかもすべてのものが徒勞であるかのごとく、思われるのである。』

信仰の反作用としてのニヒリズム、信仰の崩壊によるパニック状況としてのニヒリズムが語られているが、これを語っているN自身は周章狼狽を脱している。「ひとつの解釈が没落した」だけのことである。「自然の無道徳性、無目的性、無意味性」も、自明のことである。

Nは、キリスト教系以外のニヒリズムについても語っている。1つは、宇宙万物の運動のなかに窮極的な「意味」、「目標」を想定し信仰すること、もう1つは、宇宙万物を統一体と信じ、この全体へ依存し、帰属し、奉仕すること、——こういうカラクリの崩壊から発生するニヒリズムのことであるが、これに関する考察は省略する。ただし、前者、つまり、宇宙万物の運動において、Nは自然現象と歴史現象とを無差別に論じていることを指摘しておかねばならない。「生起」とか「生成」とかいう同じコトバで、自然と歴史とを同列に論ずることはできない。人間の希望と絶望、苦闘と挫折、これによって歴史が織られている。キリスト教とその反作用も、この歴史の1部でしかない。歴史においては、信仰においてのごとき「絶対的価値」は登場せず、すべて「相対的価値」である。しかし「相対的価値」の崩壊からも、あるいは、その達成の見込がない——個人の生存期間を基準にして——ことからニヒリズムは発生する。のみならず、この「相対的価値」は、その当事者である個人や集団の心情においては「絶対的価値」なのである。歴史現象にくらべれば、自然現象は、人間の価値設定と価値崩壊にたいする関連が、ずっと少ない。自然現象も、凶荒とか不漁つづきとかいう小さいものから、天変地異という大きいものまで、ニヒリズムの誘因になるとしても。

なお、後者、つまり宇宙万物への帰属感、宗教の繩張りであろうが、もっと小さい、相対的な全体、すなわち集団とか階級とか国家とかへの帰属感、ならびにその反作用としての疎外感、ニヒリズムと関係してくることも留意すべきである。

信仰の崩壊から、「最高の諸価値」の崩壊からニヒリズムが発生した。このニヒリズムには悲愴感、危機感がつきまとうであろう。「〈何のために?〉というニヒリズムの問いは、これまでの習慣から発するものである。この習慣の力で、目標は外部から——つまり、なんらかの超人間的な權威によって、立てられ、あたえられ、要求されるように思われた。』だが、神が1つの虚構でしかないこと、神があたえた「目標」など存在しないこと、これを納得すれば危機感は解消する。ニヒリズムは「ノーマルな状態」となる。この状態は宗教(絶対的な諸価値)を信奉する立場からみるとニヒリズムであろうが、それ自体としては、ニヒリズムという名称は不要になっている。しかしNは、この「ノーマルな状態」にたいして、誇らかにニヒリズムの名をあたえる!! この「ノーマルな状態」としてのニヒリズムは、キリスト教からみてのみニヒリズムであって、克服される必要はない。

「ノーマルな状態」としてのニヒリズムを理論的に裏づけるために、Nはフォイエルバッハを援用する。「私たちが現実の事物や空想の事物に貸与してきた美や崇高のすべてを、私は、人間の所有するもの産出したものとして返却を要求したい、人間の最も美しい弁護として。詩人としての、思想家としての、神としての、愛としての、権力としての人間——。おお、人

間が諸事物に贈与してきた、王者のごときその気前よさよ！こうして人間はおのれを貧しくし、おのれを惨めなものと感じることになったのだ。人間は驚嘆し崇拜した、しかも、人間が驚嘆するものを創造したのはほかならぬ人間であるということをおのれに隠しえた、これこそこれまで人間の最も偉大な没我であった。これはフォイエールバッフの「神は人間の自己疎外である」という命題を、情熱的に言いかえたものである。現実の個人意識としての人間からみると、いささかそらぞらしい人間賛美にも見え、ニヒリズムがナルシズムに変身したか、といぶかる気持もおこるかも知れないが、人間の背景として、歴史的人類を考えれば、しごく当然の見解である。こうして神と人間が逆転すれば、道徳から「神の後光」は消える。そのかわりに「人類の後光」が輝く、とも言えるのだが、とにかく「神の後光」のカラクリが点検されねばならない。「最高の諸価値とは、それらに従うことがきわめて困難で犠牲が大きくとも、人間がそれに仕えて生きるべきであったものであるが、こうした社会的諸価値は、その調子を強めるために、「實在」として、「真の」世界として、希望や未来の世界として、あたかも神の命令であるかのごとく、人間の頭上にきずきあげられてきた。神も「神の後光」の道徳も必要でなくなった。その原因をNは「人間の力の増大」——これは、はなはだアイマイな概念なのであるが——にあるとみる。「人間の価値を、禍悪等の価値を、それほどまでに大げさに強調することは、現今ではそれほど必要ではなく、私たちは、こうした価値が大いに割引されてもそれに耐え、多くの無意味や偶然を許すことができるのである。人間の、達成された権力は現今では訓育手段を軽減することをみとめているが、この訓育手段のうちでは道徳的解釈が最強のものであった。「神」は1つのあまりにも極端すぎる仮説である」。

こうしてキリスト教の「最高の諸価値」は相対化される。相対的な諸信念、諸価値の崩壊によるニヒリズムが考察される。

「A. 精神の、増強された力の徴候としてのニヒリズム、能動的ニヒリズムとして。

それは強さの徴候でありうる。精神の力は、これまでの諸目標（「確信」、信仰箇条）がおのれに適合しなくなったほどに成長していることがありうる。

——つまり信仰とは、一般には、生存条件の強制を、生物がそのもとの栄え、育ち、権力を獲得する事態関係の権威のもとへの服従を、表現している……。

他方、それは、いまやふたたび目標を、何故にを、信仰を、生産的に設定するほどには十分でない強さの徴候でもありうる（以下略）。

B. 精神の力の低下と後退としてのニヒリズム。受動的ニヒリズム。

弱さの徴候として。精神の力は、疲れはて、憔悴しきっており、そのためこれまでの目標や価値が適合しなくなり、いかなる信仰をもみだしえない——

かくして価値や目標の統合（これに、あらゆる強い文化はもとづいている）が解け、そのため個々の価値がたがいに戦いあうにいたる。分解

かくして、元気づけ、癒し、鎮め、麻痺せしめるすべてのものが、宗教的とか、道徳的とか、政治的とか、美的とかなど、さまざまに変装して、登場してくる。

引用が長すぎるが、やむをえない。これはニヒリズムにかんする、Nの「一般理論」とも言うべきものであるから。しかも、この「理論」の射程、有効性にかんして、疑問点がありすぎるからである。2、3の考察を試みてみよう。

能動的ニヒリズムとは「精神の力」が発達して、いままでの価値（確信）が、小さすぎて寸法があわなくなることから発生する。受動的ニヒリズムでは、「精神の力」がやせ衰えて、逆の意味で寸法が合わなくなる。

幼児は、幼児向けテレビ番組に熱中するが、年長になると、見向きもしない。この場合には、「精神の力」の発達があるが、ニヒリズムとは無関係である。おとなの場合、たとえば、ある芸術の領域で鑑賞能力の向上がおこりうる。これもニヒリズムと関係ない。しかし、芸術家の側では、「精神の力」の発達によるニヒリズムもありそうだ。つまり、いままでの価値——先人が、あるいは自分が確立し愛好した技法——では、満足できなくなって、新境地を求めて暗中模索している状態。

ヒッピーが「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」(確信、価値)を捨てて旅鳥となり、禅とかヨガに熱中したりするのは、「能動的ニヒリズム」なのか、「受動的ニヒリズム」なのか、それとも両方なのか。

幕末から明治にかけて、たとえば長州藩士が、「藩のため」(最高価値)から「日本国のため」へと転換したとき、コンフォルミストはべつとして、意識的な人びとの心中では、数時間ないし数箇月の、大地がゆらぐ思いがしたはずである。これはニヒリズムであるが、「精神の力」の発達ではない。外圧、つまりインドや中国のようになってはまずいことを知っただけである。

トルストイの『イワン・イリッチの死』において、死期のせまった主人公が、いままで大事だと思っていたしごとの空しさを実感するが、これもNの「ニヒリズム一般理論」では歯のたたないニヒリズムである。

要するに、Nのこの理論の有効性を判定するには、文化史とか思想史の劇的な転換期に照明をあてて、「検証」してみるしかないが、あまりみのある仕事とも思えない。のみならず、Nのニヒリズムにかんする考察を、より深く、より正確に「解釈」するためには、「権力への意志」と称される、Nの汎生物主義的な認識論・形而上学の迷路へ深入りせざるをえない。それはこの小論の領分をこえる。(などといって逃げておくのが無難であろう)。

Nの「ニヒリズム一般理論」を、N個人の体験に照らして「検証」してみよう。

1. ナショナリズム。プロイセン・フランス戦争がおこると、Nはスイスから従軍を志願し、許可された。ドイツ民族の運命、ドイツ帝国の建設、これがNを陶醉させた。ナショナリズムは「最高価値」となった。Nは他のすべてを投げうって、これに身を捧げることができた。だが、この陶醉は一時的で、以後Nは「愛国心」にたいして嘲笑的態度をとりつづけた。この場合、ナショナリズムという価値(確信)が崩壊したわけだが、Nの「精神の力」が発達したためではない。ニヒリズムも発生しなかった。

2. これに先だつショーペンハウエルの『意志と表象としての世界』にたいする敬愛は、数年後に克服された。この場合には「精神の力」の発達による「能動的ニヒリズム」があてはまるかも知れない。ただし、ショーペンハウエルの思想内容がベシズム——Nによればニヒリズムの前段階——であり、Nはその内容に感動したことはいうまでもないが、より強く(あとになるほど)ショーペンハウエルの姿勢に感動した。つまり、ショーペンハウエルが人生を見つめ、語る、その姿勢——デューラーの画の『死と悪魔と同行する騎士』の姿勢——に感動した。この側面でのNのショーペンハウエル評価は「崩壊」したわけではないので、事情は複雑になる。

3. ワグナーの場合。ワグナー崇拜の「崩壊」は、Nの存在意義の崩壊に等しい強烈なニヒリズム体験であった。「1876年ごろ、いまやワグナーがどこへ出ていこうとしているのかが分ったとき、私のこれまでの意欲全体が危険にさらされているのを見て、私はぞっとした。私は彼にきわめて固く結びついていたのである。深く一致した諸慾求のあらゆる紐帯によって、感謝によって、彼のかげがえのなさ、かつ(彼を失えば)¹⁶ 前途に絶対的な窮乏しかな

いことによって。

ちょうどそのころ、私には、私が文献学と教職とのなかへ、——私の生涯の1つの偶然、1つの応急策のなかへ——きびしく投獄されていると思われた。私はもはや脱走するすべも知らず、疲れはて、精魂もつきはてていた¹⁶。この場合のニヒリズムは、Nの「精神の力」の発達によらず、「最高価値」(ワグナー)の側の変質によって発生した。この現象はNのニヒリズム理論の射程外にある。(ニーチェの側の変質の潜在的進行の問題は省略する)。

(Nはワグナーの墮落——カトリックへの、世俗への——に絶望したが、ワグナーはスポンサーたるバイエルン国王や観客たちの信仰をも考慮せざるをえなかったと思われる。ワグナーは「営業」をせねばならなかった。さいきん出版されたコジマ・ワグナーの『日記』によると、ワグナー自身——つまり、Nのいう「トリブシェンのワグナー」——が、「パイロイトのワグナー」を嫌悪し絶望していたらしいが、これをNは知るよしもなかった)。

4. いちばん興味のある問題なのだが、N自身が信仰を紛失したいきさつについて、N自身の記録はみつかっていない。いかなる精神的危機があったのか、それとも精神的「平和革命」だったのか、何もわからない¹⁸。

Nにとってニヒリズムとは主として、いわゆる内面的、精神的問題であった。しかしニヒリズムとかペシミズム(ニヒリズムの前段階とNは考えた¹⁹)の遠因とか徴候として、社会、政治、文化(広義)等における諸現象をNは拾いだしている。そのいくつかを引用しよう。

たとえば政治におけるニヒリズムの現象。「ウソが支配している。目先だけに役立つ」。「政治的考法や経済的思考法のニヒリズム的な諸帰結。ここではすべての「原理」がいつしか俳優の演技となってしまう。すなわち、凡庸さ、卑劣さ、不誠実さなどの臭気。ナショナリズム、アナキズムなど。罰。救済する階級や人間が、是認する者が欠けている。議会制民主主義にたいするNの敵意が露骨に発散されている。ここで例挙されている欠点は事実であり、現代でも同様である。しかし、こういう欠点に圧倒されない程度に、長所があり良い活動があるから、議会制民主主義は、機能し、貢献してきた。こういう長所をみようとならないのは片手落ちである。しかも、必要あらば賢明で強力なリーダーシップも発揮される(英国のピットたちのごとき)。貴族によって支配され指導される貴族政治をNは望んだのか。それとも君主独裁制か。芸術批評、哲学批評におけるNの精彩は、政治的批評では消えている。Nの政治批評は「凡庸」である。

社会についてはどうか。

「現代の暗鬱化の歴史のために。国家の遊牧民(官史その他)。〈故郷〉なし。家族の衰退。」(数項目、省略)

北欧的不自然性。

アルコールへの渴望そして労働者の〈困窮〉²⁰。

農村から都市への人口移動、農業の比重の相対的低下、商業における個人営業の比重の、工業における家内工業の比重の相対的低下、これはNの時代に、すでに進行しつつあった。農業、個人商店、家内工業等において、家は親子代々の生産の単位でもあった。この部門の相対的減少、他郷の他の部門への転職は、全般的に、家族の分散、核家族化の進行、「家」の崩壊をひきおこす。故郷の村から出て、他郷の都市でくれば、精神的安定感を失いやすからう。「根こぎにされた人びと」の大量発生は、社会的風潮として、ペシミズムへの誘因とならう。しかも、こういう人びとの労働条件の劣悪さ、苛酷さ。都市のスラムの拡大。「アルコールへの渴望」も、無理もあるまい。Nは社会主義者を敵視していたから、彼らの騒ぎたて

る、いわゆる「労働者の〈困窮〉」という表現で、社会主義者への軽蔑をも示しているが、こうしたとして、労働者の困窮は解消されないのである。

「北欧的不自然性」というペシミズムにたいする風土論的視角も、いくらか面白かりう。

Nが指摘する芸術におけるペシミズム的徴候（「芸術のための芸術」、エキゾチズム、コスモポリタニズム、自然主義、トルストイとドストエフスキー等）の考察は省略して、ペシミズムの、特別な「社会的原因」を眺めねばならぬ。これはNの奇怪なドグマからのみ、Nのおちいった袋小路からのみ、眺めうる風景である。かつ、袋小路そのものでもある。

「ペシミズムの到来にとっての諸原因、すなわち、

1. 生の最も強力な最も未来に富んだ衝動がこれまで誹謗され、そのため生がおのれを呪うにいたるといふこと。
2. 人間の増大する勇敢さとより大胆になった不信が、この本能は生から分離せしめられないといふことをさとして、生に向きなおるといふこと。
3. この葛藤をまるっきり感ずることのない最も凡庸な者どもだけが榮えて、高級種は挫折し、みずから顔廃分子と思ふこと、——他方、凡庸性が、みずからを目標であり意味であると称して、うんざりさせるといふこと（——誰ひとりとして「何のために？」にたいして、もはや答えることができないといふこと——）。
4. 卑小化、苦痛への忍従、不安、焦躁、雑踏が、たえず増大するといふこと、——これら全傾向の、いわゆる「文明」の現実化がますます容易になるといふこと、個人がこの巨大な機構に直面して、氣落ちし、屈服するといふこと²⁴。

盲目であるが故に幸福な凡庸な者たち、こういう家畜化された人間が支配的である社会、目ざめているが故に苦しみ悩む「荒野の狼」、これがNが眺めた社会の風景であり、かつ、N自身の心の風景でもあった。孤絶感にみちたNの自負を聞こう。「現在、われわれの現存在の問題性にかんして悩んでいない人びとには、私は何も言うことがない。そういう人びとは新聞でも読んでいればいいのだ」²⁴。

Nの袋小路を見物せねばならぬ。Nが構築した（「投企」した）新しい「目標」は何か。かんたんに言えば、超人の産出である。

Nの狙いは『福音書』に対抗する『新らしき福音書』であった。Nは人類の未来を憂慮した。皮肉に云えば旧約の予言者のごとき、過大な責任感である。だがNは人類全体の向上、進歩を断念した。選ばれた少数者の育成が目標となった。より強く、より高貴な人間、この形成の手がかりが求められる。Nは実例を探す。古代イスラエル人、タキトゥスの時代のゲルマン人、ベドウィン人、コルシカ人²⁵はては「偉大なる様式」として「日本のハラキリという自殺²⁶」まで探しあてる。そして有名なナポレオン賛美。

善い人間をつくること、強い人間をつくること、これは対立するものとNは思いこんだ。より強い人間——アイマイな言葉であるが——をつくりだすために、いわゆる反社会的本能のなかから役立つものを拾いださねばならぬ。「神の死」によって、良心は「神の声」から「社会の声」へと変ったが、これはNによって「畜群の声」へと「解釈」変更がなされた。道徳から「神」と「社会」の「後光」が除去されただけでなく、道徳の内容的再編成、ないし無道徳主義が主張される。目的は「超人の産出」である。

ふとNは苦笑する。そしてドストエフスキーと同じ疑念をつぶやく。「悪人のために、晴れやかな良心をとりもどしてやること——これが私の、意図せざる努力であったのか？」²⁷。

注

1. Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe; Herausgegeben von G. Colli und M. Montinari; Walter de Gruyter; Berlin, New York 1974(以下KGWと略); Achte Abteilung 11(411); Vorrede. KGW はニーチェ全集の決定版とも云うべきものである。その第8部(3冊)が、いままで『権力への意志』として刊行されていたNの遺稿集であるが、『権力への意志』から除外された遺稿(このなかに、たとえば、ドストエフスキーの『悪霊』のフランス語訳とかボードレールの『赤裸の心』からNが抜粋し、感想を加えたものなどがある)を追加し、新たに編集しなおしたものである。KGW は、いままでもっとも定評のあった Großoktav-Ausgabe, Band XV, XVI との対照表を示している。これは Taschenausgabe (von Peter Gast und Elisabeth Förster-Nietzsche) の Band 9, 10——理想社版ニーチェ全集第11, 12巻, 原佑訳——と、「まったく非本質的な変更と補充をもって」(KGW, VIII s.350) 対応している。ここで使用する註には、KGW, VIII を略す。註の最初の数字は VIII 中の章を示し、カッコ内の数字は、その章の中のNの稿稿の番号を示す。セミコロンの右はグロス・オクターブ版『権力への意志』における番号を示し、その右に感嘆符がつけられていれば「不完全, 不正確, または原稿解読の誤り」を示す。セミコロンの右の数字が2箇以上あれば、原稿の文章が分割されていることがわかる。この要領でしめすと、註1は11(411); Vorrede.
2. 5 (71); 4(!), 5(!), 114(!), 55(!)
3. 9 (35); 23, 2, 22, 13(!)
4. カッコとじ忘れはNの原稿のまま
5. 2 (127); 1 (!). KGW の誤りで、この感嘆符がついていなかった。ただし、この誤りを発見したのは、原佑氏の訳と読みくらべていたためであるから、あまり自慢できないが。
6. 10(192); 9(!), 3, 6, 11(!)
7. 5 (71); 既出
8. 5 (71); 既出
9. 9 (43); 20(!)
10. 9 (35); 既出
11. 9 (123); 25(!) KGW に(!)がないのは誤り。「ニヒリストの発生によせて。じぶんが本来知っていることにたいする勇氣は、おくればせにしか発生しない。私がこれまで徹底的にニヒリストであったこと、これを私は最近やっと私にたいして白状した。私をニヒリストとして前進せしめたエネルギーと無頓着さ(ノンジャランス——これがポケット版・理想社版ではラディカリズムとなっている)が、この根本事実にかんして私を欺いたのである。ひとつの目標へむかって前進しているときには、「無目的自体」が私たちの信仰の根本命題であることは不可能にみえる(全文)。
12. 11(87); 2. Buch Motto
13. 11(100); 7
14. 5 (71); 既出
15. 9 (35); 既出
16. 9 (42); 460(!), 1005(!): カッコ内は補って訳した。もとの文章は und ich war fest an ihn gebunden, …… durch Dankbarkeit, durch die Ersatzlosigkeit und absolute Entbehrung, die ich vor mir sah. さいごの und 以下を独立さすべきかもしれぬが。
17. 『シュビーゲル』18. Juli 1977の紹介記事による。
18. 西尾幹二著, ニーチェ第1部, 168頁, この本は豊富な資料を、じぶんの頭と実感とで消化し切って書かれている。この意味で、日本だけでなく世界でも、劃期的なN文献といえる。残念ながら、まだ初期のNの部分しか出版されていない。
19. 2 (131); 69
20. 2 (131); 既出
21. 2 (127); 既出
22. 2 (122); 59

23. 9 (162); 33
24. 10(196); なし
25. 5 (88); なし
26. 5 (81); なし
27. 7 (6); 306: もとの語は *mein unwillkürliches Bemühen*.